

「ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション」に参加して 荒木伸二

他の2人ともそうだと思いますが、応募して選ばれた時点では、一体、実際、何が得られるか明確にはイメージできないままでのスタートだったと思います。そんな中、まず前年までの参加の監督たちから話を聞く会を作っていただいたのがとても有り難かったです。現実を知る第一歩になったかと。そして日本での数回のワークショップのおかげで目的意識がはっきりしました。ぼんやり海外進出というよりは共同制作の足掛かりという感じでしょうか。過度な期待はしないけど、淡い期待（笑）と共に渡航し、非常に充実した、忙しくて楽しい、今後につながる、1週間を過ごせたと思います。

そしてベルリンのEFM。恐らく、ユニジャパンさんのありったけのコネクションを掻き集めてピッチの相手であるプロデューサーの方々を呼んで頂いているからだと思いますが、ピッチ相手の方々のレベルが非常に高かったです。話が通じるし、嫌な感じはないし、しっかり指摘や批判もして貰える。

もし、今回プレゼンした企画を国内のみで制作することになって今回頂いたフィードバックを血肉として良いものと出来ると思いました。

企画の内容に関わる部分については細かく触れませんが、例えばでいうと、アートハウス系の日本との共同制作をいくつもしている会社のプロデューサーの方から『アートハウス作品にもジャンル映画的なフックがないと正直もう興行的に成立しにくくなっている』だとか別の映画祭もやっているプロデューサーから『実制作のスケール感として予算を捉えるのではなく作家から作品が離れていく距離感として、予算というものを捉えてみてほしい』とか、また別の方からは『企画書の全てを完璧に仕上げるということではなく、どの順番で見せ、どこまでは考察が済んでいるか明確にする、ということでもいい』などなど。

では、今回のプロジェクトでは、ただ勉強になっただけかというところではなく、すでに何かしらに漕ぎ着けたということはまだありませんが、今回連絡先を交換し合ったプロデューサーの方々と、あるいは、それ以外の方々と、海外との共同制作についても、単純に、あるのでは、と実感として思っています。甘いかもしれませんが。

ただプロデューサーと同行して進めた内容ではないので、監督に対しての物言いで、優しく言ってもらっている部分はあると思いますが、引き続き、連絡を取り合ったり、新たな企画マーケットに参加したりして、『このプロジェクトから海外共同制作に進んだ映画』を実現したいと思っています。

既に他の映画祭の企画マーケットに申し込んだりしていますが、足繁く映画祭なりマーケットなりに通って顔を出すのが一番いいはずなので、それでいうと、日本と欧米の地理的な距離というのが最大の障害だと思います。何度も飛行機に乗って往復するのは金銭的にも時間的にもそう簡単ではないです。因みに、言語（英語）については、堪能ではないのですが気合いで押し切りましたし、今後も押し切ろうと思います。